20世紀初期ラーホールにおける ウルドゥー文学の出版状況（1）

山根　聡

1　はじめに

ラーホールはムスリム王朝やスィク王国の繁栄と共に発展した都市だが，ウルドゥー文学史上目覚ましい発展を遂げたのは19世紀後半以降で，現在ではその重要拠点に成長した。この急速な成長過程にはイギリスによる教育機関設立や文芸活動の推進が挙げられるが，大衆にそれを積極的に受容する力がないと発展はありえなかった。ラーホールでのウルドゥー文学発展は，公的レベルの啓蒙活動に民間レベルの活発な出版・創作活動が拍車をかけたと言える。ラーホールの出版状況をみると，ウルドゥー出版活動の活発化はパンジャーブ州都に制定された1849年以降のことで，民間レベルの積極的な文芸誌の出版や創作の発表がこれに追随する形をとっている。またこの頃インド・ムスリムのヘゲモニーがアリーガルやデリーからパンジャーブへと移ったことも注目すべきである。これは19世紀後半に整った教育環境で成長したパンジャーブの人々が中間層を形成し，20世紀に力量を発揮したことによると考えられる。本稿ではラーホールでウルドゥー出版活動が顕著に活性化した20世紀初期，特にインド・パキスタンが分離独立した1947年までに焦点を当て，出版状況の分析によってウルドゥー文学史におけるラーホールの発展過程を明らかにする。

2　19世紀後半のラーホールにおけるイギリスの援助と出版状況

ラーホールは古くから多くの文人を生んだが，スィク王国宮廷ではペルシア語が用いられ，民衆はパンジャービー語を話していた。1849年にイギリス政府がここをパンジャーブ州都に制定したことで，公文書や私的書簡等を通し，人々がウルドゥー語に触れる機会が増えたはずである。ラーホールでは，1850年刊行の新聞『コーエ・ヌール Koh-e Nūr』を筆頭に，州都制定以降ウルドゥーの新聞・雑誌が大量に出版された。ウルドゥー文学の出版活動に貢献したナワル・キショールが上掲紙発行者ムンシー・ハルスク・ラーエを訪ねたことは当時のラーホールの出版の水準の高さを推測させる。また同紙発行所に勤務した人物が後に他の

ウルドゥー新聞・雑誌発行に携わっている。この地で出版された主要な新聞・雑誌には，新聞『光の海 Daryā-e Nūr』(1850年) 雑誌『得難き鳥 Humā-e be bahā』(1853年) 雑誌『インドの教師 Mu'allim-e Hind』(1854年)『パンジャービー新聞 Panjābī Axbār』雑誌『パンジャーブの太陽 Xvushed-e Panjāb』(1856年)『公的新聞 Sarkārī Axbār』(1858年) 機関誌『パンジャーブ協会誌 Risāla-e Anjuman-e Panjāb』(1865年) 月刊紙『パンジャーブの師 Atālīq-e Panjāb』隔週刊誌『パンジャーブの鳥 Humā-e Panjāb』『パンジャーブ協会新聞 Axbār-e Anjuman-e Panjāb』(1870年) 週刊新聞『大衆新聞 Axbār-e 'Ām』(1871年)『パンジャーブの太陽 Āftāb-e Panjāb』(1873年) ラーホール初の日刊紙『パンジャーブ日記 Roznāmca-e Panjāb』『インドの先導者 Rahbar-e Hind』(1875年) 雑誌『パンジャーブ・パンチ Panjāb Punch』(1878年) 新聞『デリー・パンチ Dehlī Punch』(1880年)『インドの友 Rafīq-e Hind』週刊新聞『インドの親友 Shafīq-e Hind』『鎖 Zanjīr』日刊新聞『朝夕 Shām o Saḥar』『朝の微風 Nasīm-e Subḥ』(1884年) 月刊誌『ザミーンダール Zamīmdār』新聞『国の報告者・即ち政治戦士 Mulkī Muxbir Ya'nī Political Sipāhi』『ティース・マール・ハーン Tīs Māl Xān』(1886年) 新聞『パイサ・アフバール Paisa Axbār』(1888年)などがあり，1887年には『ジャアファル・ザタッリー Ja'far Zaṭallī』『悪戯者 Sharīr』のような滑稽・風刺を主題とした定期刊行物も出た。この旺盛な出版活動状況を，デリーの代表的詩人ダーグが次のような詩句に残した。

「カルカッタの人士より　ラーホール人士が優りゆく」

出版活動の促進にはイギリスの援助に加えラーホール，カシミール，パティアーラ等のライース（名士）によるパトロンとしての出資もあった。イギリス政府やライースたちは，デリーやラクナウ，カルカッタ等から人材を呼び寄せ，ラーホールでの出版事業に従事させた。1856年刊の『パンジャーブの太陽』は発刊目的に，パンジャーブではまだウルドゥーが極めて限られた機会にしか用いられず，人々が公職を得るのも困難なので，この克服にウルドゥーの新聞を発刊する，と述べた。この文脈から当時のラーホールでウルドゥーを使用する人々が存在しても，積極的に用いる段階に至っていなかったことが推測できる。19世紀後半という時期はラーホールにウルドゥーが定着する時期だったと言えよう。またこの地に来たデリーやラクナウ等の人材がパンジャーブの人々のウルドゥーの誤りを訂正し，新聞等で使用される標準的なウルドゥーを定着させる役割を果したとも評価される。出版活動は建設的なものと評価されるが，イギリスの援助の

下，西欧文化の受容に積極性を示し，イギリス寄りの論調を展開させたため，ラーホールのジャーナリズムはイギリスへのお世辞だとの指摘もある。だが，当事者がアリーガル運動の影響下で西欧の教育を受け，イギリスの援助下で出版活動を行った必然の結果とも言えよう。これはまたラーホールでの教育・出版活動に対するイギリスの政策の影響関係を知る手掛かりにもなろう。

出版活動の活発化と共に，文人を育む上で必要なのは教育の充実である。19世紀のラーホールは教育面でも大きな発展を送げた。パンジャーブはムスリムの多数居住地域として知られ，インド・ムスリム近代化の指導者サル・サイヤドもパンジャーブの重要性に鑑み四度にわたりラーホールをはじめパンジャーブを訪れた。1857年の大反乱以降インド・ムスリム間に充満した不満の対処と，パンジャーブの人々と友好関係を結ぶ手段としてイギリスはラーホールに次々と教育機関や啓蒙組織を設立させた。King Edward Medical College (1860年に医学校開設，88年カレッジ昇格) Government College (1864年) Forman Christian College (1864年) Oriental College (1869年) Mayo School Of Art (1875年) Lahore High Shool (1876年) Panjab University (現 University Of The Punjab 1882年) Aitchison College (1886年) Lahore Mission College (1864年) などと同時に付属図書館も設立された。1864年にはラーホールで第1回パンジャーブ美術工芸展を開催，この機会にラーホール博物館を設立させるなど，教育・文化事業面での充実がめざましかった。

啓蒙組織として筆頭に挙げられるのはウルドゥー近代詩の確立に大きく貢献した社会啓蒙組織「パンジャーブ協会 Anjuman-e Panjāb」である。協会は1865年に設立され，協会主催の詩会も1874年から翌年まで開催された。詩会はウルドゥー近代詩の先駆者ハーリー (Xvājah Alṭāf Ḥusain Ḥālī 1837-1914) やアーザード (Muḥammad Ḥusain Āzād 1830-1910) の活動拠点となり，その活動内容は協会機関誌に掲載されたばかりでなく，デリーやラクナウ，メーラト等の新聞・雑誌にも紹介され，サル・サイヤドもこれを評価した。

ラーホールにおけるウルドゥー文学の発展過程の観点から19世紀の出版活動を顧みると，イギリスと土着のパトロンによる出版・教育・啓蒙活動の促進によってウルドゥー語が定着し，これを受容することで文学者を生む下地が形成された時期だったと言えよう。

〈キーワード〉ウルドゥー文学，出版，ラーホール

(大阪外国語大学講師)